

言語は謎に満ちている。

その謎を解き明かす楽しさ。

子どもはみな、4歳ぐらいまでに母語の基本を習得します。

では、なぜ、文法のルールも知らない幼児が

言語という複雑な仕組みを理解し、使いこなせるようになるのでしょうか。

そんな言語の謎を解き明かすのが言語学の醍醐味、と高野祐二先生。

日ごろ当たり前のように使っている言語の不思議さ、おもしろさに

私たちが誘ってくれます。



言葉の仕組み(文法)を学ぶ楽しさを伝えたい。

中学・高校時代から英語が好きで、英語の教師になりたいと思っていました。英語が好きと言っても、私は英会話や英語の物語を読むことより、「英語の仕組み」に興味がありました。なぜ飛行機は飛ぶんだろう？クルマのエンジンの仕組みは？など、モノの仕組みを考えたり、勉強したりするのが好きだったこともあり、英文のメカニズムを学ぶことが楽しかったんです。

私たちが新しい外国語を学ぶ時は、まず仕組み(文法)を学びますよね。で、その文法でつまづいたり、語学が嫌いになってしまうことが多いんです。でも、言語そのものの仕組みを考えることって、実は奥が深くておもしろい。私が教師をめざしたのも、そんな言葉の仕組みのおもしろさを生徒たちに伝えたいと思ったからなんです。

人間は生まれながらにして

言葉を身につけるプログラムを備えている。

教師を志していた私が研究者の道を選ぶことになったきっかけは、大学時代の授業で出会った生成文法です。言語の本質に迫るこの


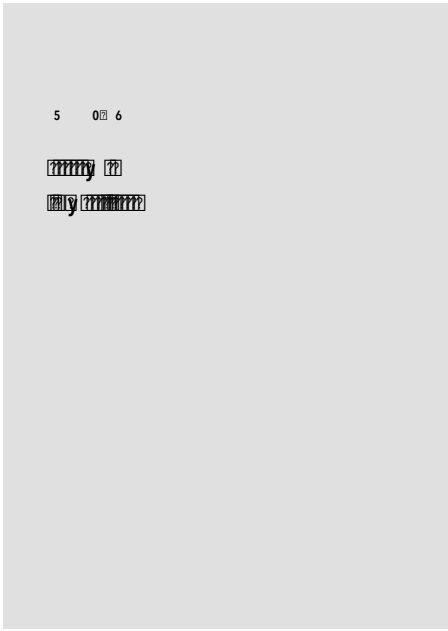
学問に興味を掻き立てられた私は、周りの勧めもあって大学院に進学。結局、日本の大学院で4年半、アメリカの大学院で4年半、合計9年間を生成文法の研究に費やしました。

生成文法はアメリカの言語学者、チョムスキーが提唱した言語理論。言語研究に自然科学の手法を取り入れたアプローチで、人間の脳に備わる言語能力の解明をめざしています。たとえば今、世界にはおよそ7,000もの言語が存在しています。でも、生まれてくる時は何語も話せません。一方、子どもは4歳ぐらいまでに、触れている言語の中核を身につけてしまいます。日本で育っていれば日本語、アメリカで育っていれば英語、というように。では、いったい、どんな仕組みがあることで人間はそれほど効率よく言葉を話せるようになるのでしょうか。しかも、それが7,000通りにもわかれる仕組みは。その問いに対して、「世界には7,000通りの言語があるけれど、実はかなりの部分は共通していて言語間の違いは単純な性質に還元される。そして、その共通の枠組みのようなものは生まれつき備わっている」という仮説が出てきます。もし、そうでないとすると、子どもが特に努力もせずに、短期間で言葉を話せるようになるのは到底無理な話。生成文法理論を脳科学の視点で実証しようとする研究者もいます。

教えて先生!

**My
Favorite**

— ?



Q. _____ **?**